

# 梅宮アンナ 病気は父を変えた 1

20200301  
「週刊新潮」  
2020年2月27日号  
掲載

6度にも及んだがん闘病、そして、人工透析の日々を経て旅立った梅宮辰夫には、“アンナパパ”としての一面がある。事実、ネオン街で名を馳せた“夜の帝王”の人生観は、愛娘の誕生で大きく変わった。

梅宮アンナが初めて明かす、知られざる「辰兄」の最期。

俳優・梅宮辰夫がこの世を去ったのは2019年12月12日のことだ。享年81。家族と近い知人のみを集めた葬儀で最愛の“パパ”を送り出し、四十九日を終えたばかりの長女・アンナ(47)が改めて胸中を明かす。あの日は、午前5時に娘のモモ(百々果)が私の寝室に飛び込んできたんです。

「ママ！ ママ！ “じっじ”が死んじゃった……」  
私が携帯の着信音に気づかなくて、モモに連絡が入ったみたい。うん、覚悟はしていたけど、やっぱり気が動転しましたね。歯磨きと洗顔だけ済ませて、娘とふたり寝間着姿のまま車に乗り込んで。都内の自宅からパパが搬送された小田原の病院に直行しました。厳密に言うと、心臓が止まったのは午前4時頃だったそうです。ただ、病院で蘇生措置をしているうちはまだ“死亡”と判断されないのだとか。7時半に私たちが病院に着くと、病室ではママ(クラウド夫人)が泣き崩れていました。そして、お医者さんからこう言われたんです。「梅宮さんには搬送直後から心臓マッサージを続けています。申し上げづらいのですが、すでに肋骨も折れている。アンナさん、どうしますか」

それを聞いた私は堪らなくなって、「わかりました。もうやめてあげてください……」とだけ伝えました。人工透析も含めて病院にはお世話になったし、治療も最善を尽くしてくれました。ただ、いまだに違う選択肢はなかったのになって考えてしまいます。

生前の梅宮は、6度目のがん闘病を初告白した本誌(「週刊新潮」)の記事(2019年3月14日号)で、渋谷区松濤の自宅を売り払って真鶴の別荘に移り住み、これまで避けてきた“人工透析”を受け始めたことにも触れている。

人工透析を始めたのは延命のためにも仕方がなかった部分があります。でも“延命”って、時に残酷なんです。パパの闘病を目の当たりにして、そのことを思い知らされました。

世界中を飛び回って魚釣りをして、いつでも好きな物を食べて呑んで、豪快に遊んで。それこそが元気の源だった人だから、自由に動けなくなるだけで日に日に弱っていくのが分かる。

元気な頃は100キロ近くあった体重も食が細ってからは50キロ台に。去年の秋口に家のなかで転んだときは、私が片手で抱き起こすことができました。ミイラのようにやせ細ってしまって、その頃には外を出歩くこともなくなりました。

芸能人だからそういう姿を見せたくなかったんでしょうね。

人工透析を始めるとわが家の生活も一変しました。何しろ、週のうち月・水・金の3日は朝7時に真鶴の家を出て、小田原の病院で4時間の透析を受け、帰宅するのは午後2時過ぎ。全身の余分な水分を取り除くので、透析が終わる頃には喉がカラカラに渴いて、もの凄い脱力感に襲われる。それこそ、1日おきにフルマラソンを走ると感じるんです。透析の後に、私が「パパの好きな焼き鳥屋さんに行こうよ」と誘っても「ああ、今日もいいや」とにかく人間の欲求が根こそぎ奪われちゃうんですね。

うん、それは悔しかったな……。パパはあれだけ多くのがんを乗り越えてきたでしょう。4年前に十二指腸乳頭部がんで11時間の大手術を受けたときも、成功する確率は“五分五分”と言われながら見事に生還した。パパの「九死に一生スペシャル」はこれで何度目かと思ったほど。それでも、もしかしたら、がんのまま終わらせてあげた方がよかったのかもしれないな……。

そう語るアンナの目は大粒の涙を湛えていた。実は、彼女は最愛の「パパ」が人工透析に至る前、医師にある“決断”を伝えたという。それは腎臓移植の申し出だった。いまだから言えますけど、私は最初から人工透析には反対だったんです。とはいえ、透析を受けないで尿毒素が溜まると、10日くらいで命を落としてしまう。それで、私もいろんな本を読み漁って、欧米では透析よりも腎臓移植が推奨されていることも知りました。それならば、って。

パパには迷惑を掛けたくないと思って生きてきたけど、過去の恋愛関係を含めてパパを心配させちゃったのは事実だから。私にできることがあるなら、パパが大変なときにこそ恩返しをしてあげたいと思った。パパのためなら腎臓のひとつくらい惜しくない。自分でも驚くほど自然に「腎臓をあげよう」と思いました。ただ、お医者さんからは、

「梅宮さんは高齢で、しかも、がん体質です。腎臓を移植してもがんが転移する可能性は否定できません。アンナさんの思いは、娘さんのために取っておいてあげてください」と言われ、私の願いは届きませんでした。

でも、パパも本心では移植を望んでいたんじゃないかな。私が「腎臓をあげる」と伝えたら、小さな声で「うん」と言っていたから。医療のことはお医者さんにしか分からないけれど、「パパがパパじゃなくなっていく」ところを目の当たりにした私としては、いまだに「あげたかった」と思います。

それくらい最期の1年間は、梅宮家にとって大変でした。介護と聞くと、「シモの世話」ばかりを想像していたんですが、家族にとって本当に大変なのは、病気が人間を変えてしまうことなんだと実感しました。

パパは度重なるがん手術で十二指腸と胆嚢を全摘して、膵臓と胃の一部も切除しているんですね。つまり、健康な人と比べて動いている臓器の数がかなり少ない。そのせいか、体温が極端に低かった。私がパパの手を握ると氷のように冷たいので、「もしパパの身に何かあっても、体温を確認したところで生きていけるかどうか判断できないんじゃないか」と思ったほど。

真鶴にいるときは、背中にカイロを貼って、レッグウォーマーまで履かせていたんですが、本人はそれでも寒くて耐えられない。だから、たとえ真夏でも暖房の設定は30度。とはいえ、家族は堪りませんよね。

# 梅宮アンナ 病気は父を変えた 2

20200301  
「週刊新潮」  
2020年2月27日号  
掲載

私が真鶴の様子を見に行ったときに「暑いなあ」と漏らしたことがありました。このひと言にパパが激怒。「出て行け　ここは俺の家なんだ。お前なんか必要ない　」って怒鳴られたんです。ショックでしたよ。いままでのパパなら「ごめんな、そうだよな」と言って空調の温度を下げて、上着を羽織っていたと思う。あの優しいパパがまるで別人になったみたいだった。もちろん、病人に向かって言い返すのは可哀想だと思っ、最初の頃は我慢していたんです。それなのに、仕事の合間を縫って車を飛ばして足を運んだら、また怒鳴られてしまった。

売り言葉に買い言葉で「そんな言い方しなくてもいいじゃない。じゃあ、帰るよ」と返したら、パパも「ああ、帰れよ　」。

やっぱり憎みましたよ。

もちろん、パパを嫌いにはなれない。そうではなくて、大好きなパパをここまで追い込んだ病気のことを心の底から憎みました。

## パパは“スーパーマン”

それまではなるべく時間を作って真鶴を訪れていましたが、以降は、両親とも話し合っ、金曜の晩から月曜の朝まで、毎週末を両親と過ごすようになりました。

でも、病気を抱える高齢の両親と離れて暮らしていると心配が尽きないんです。パパが6度目のがんを宣告された頃、ママも膠原病と診断されてね。ママは松濤の家を気に入っていて、近くには友達もたくさんいる。真鶴に移ってストレスが溜まっていたんだと思います。いまもステロイドを服用していますが、一時は顔がパンパンに腫れるムーンフェイスという副作用に悩まされたことも。

見かねた私は、去年の10月に自宅を引き払って、港区内に私名義で大きめのマンションを借りました。私と娘、それに両親とワンちゃんが一緒に暮らすためです。「都会に戻ればパパもママも元気になるんじゃないか」って思ったんです。でも、パパは結局、1カ月で「ここは嫌だ。真鶴がいい」と言い出して帰ってしまったんです。海が好きなパパにとって、真鶴の景色に敵うものはなかった。それに、“辰ちゃん漬”が人気だった頃に買ったあの別荘は“漬物御殿”と呼ばれていて、パパも思い入れがあったんでしょうね。いまとなっっては大好きな真鶴で息を引き取ったことが救いに思えます。

闘病中のパパが「イヤミ大魔王」になったことにショックを受けたのは、それまで私が愛され続けてきたからだと思うんです。パパは若い頃に夜遊びばかりしていたから、「罰が当たって五体満足な子どもが生まれられないんじゃないか」と悩んでいたそうです。1972年に私が生まれると、真っ先に手足の指を数えたとか。

まもなく最初のがんが発覚したこともあって、パパはタバコも夜遊びもやめました。それどころか、どこに行くにも赤ん坊の私と一緒に。撮影所に私を連れて行って騒動になったことも。だって、役柄が“スケコマシ”なのに、撮影の合間に私のオムツを替えるんだから。監督が“なにマイホームパパみたいなのことしてるんだ　”と激怒して台本を叩きつけたと聞きましたね。

いろいろと言われますけど、パパが私の恋愛に直接、口を出してきたことは一度もありませんでした。それなのにワイドショーでは怒ってみせるでしょう。「そんなに嫌なら、私にはつきり言えばいいでしょ」と迫ると、「その話はいい」って、会話が止まってしまう。本音ではパパは、私の恋愛関係が嫌だったと思うんですよ。私もパパが「アイツはいいな」と思える相手を好きになれたらよかったんだけど……。

ママを見ていると、パパみたいにしっかりした彼氏がいたら楽だろうなって憧れることはありました。でも、パパのように“スーパーマン”みたいな人には出会えない。パパを超える男性がいるなら、ぜひお会いしてみたいですね。

真鶴の家は維持が大変だから手放すことになると思います。娘のモモは留学する予定だし、ママもお友達の近くで暮らしたいと話しているので、梅宮家の女3人は別々の道に進むことになりそう。パパとの思い出を胸に留めながら、私も自分の生活を取り戻していきたいと考えています。